HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	支援を拒否する自閉症スペクトラム特性をもつ人に対する介入プログラムの開発［論文内容及び審査の要旨］
Author(s)	山本, 彩
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第11858号
Issue Date	2015-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/59182
Rights(URL)	https://creativecommons.org/licenses/by-nc-sa/2.1/jp/
Type	doctoral thesis
File Information	Aya_Yamamoto_abstract.pdf, 論文内容の要旨

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

学位論文内容の要旨

博士の専攻分野の名称　博士（教育学）　　氏名　山本　彩

学位論文名

支援を拒否する自閉症スペクトラム特性をもつ人に対する介入プログラムの開発

近年，自閉症スペクトラム障害（以下、ASD）特性をもつ人への支援方法は急速に発展してきた。しかしその多くは本人への直接支援を前提としているものであり，本人への支援が必要と考えられるが本人は支援を拒否するという場合については介入方法が未整理である。我が国では支援制度の特徴から、未診断、未療育のまま思春期青年期を迎えるASD特性をもつ人は依然多い。そうした二次的な問題から、社会的ひきこもりや反社会的行動を呈してしまうことが指摘されており、支援の拒否につながると考えられる。

支援を拒否する本人の介入のためには，物質依存者とその家族に対して包括的に介入し本人への動機付けを高めるプログラムであるとして、優れた治療成績が確認されているCommunity Reinforcement and Family Training（以下、CRAFT）が参考になると考えられる。一方、CRAFTには、ASD特性への支援が加味されていないことと、本人が深刻な家庭内暴力や犯罪行為をもつ場合にはプログラム適用から除外するという課題があるため、CRAFT にASD特性への支援と危機介入を組み合わせる必要がある。

そこで本研究では、ASD特性が背景にあって、社会的ひきこもりや反社会的行動などの行動の問題を示す人たちに対して介入ができるよう，CRAFT，ASD支援、危機介入を組み合わせたプログラムを開発し、プログラムの効果検証をおこなうことを目的とした。

論文の構成は以下であった。

第1章では「関連する研究」として、本稿の土台となる用語や先行研究を整理し概観した。主にASDの概念や、ASD特性に有効と考えられている支援方法、ASD特性と法的に介入が必要な状況との関連、ASD特性と社会的ひきこもりとの関連、CRAFTの基本構造、などについて検討した。

第2章では「プログラム開発」として、CRAFTにASD特性への支援と危機介入とが組み合わされ、プログラムが作成された。先行研究に基づきプログラムを作成するとともに、このプログラムを運用する上で必要と考えられる社会システムや、支援者に必要と考えられるトレーニング、プログラムを普及させるためのツールなどについても述べた。

第3章では「プログラムの倫理的課題と方法論的課題」として、第2章で作成されたプログラムの効果検証に先駆け、研究の倫理的課題と方法論的課題について整理した。支援を拒否する人に介入をする以上、その運用にあたっては本人の人権への最大の配慮が必要となる。また、家族にとってあまり知られたくないデリケートな話題をプログラムで取り扱うということで、家族への配慮も当然必要となる。このようにプログラムを運用するだけでも多くの配慮を必要とするが、さらに研究協力も依頼するとなるとより一層の倫理的配慮が必要となる。この章ではそうした倫理的課題について整理、検討するとともに、倫理的課題に配慮するために制限されるエビデンスレベルをはじめ、その他の方法論的課題についても検討した。

第4章では「社会的ひきこもりへのシングルケーススタディ」として、本稿プログラムの前身となっ

たプログラムを2事例の ASD 特性のある社会的ひきこもりに用い、シングルケーススタディの形式で報告した。2事例のうち1事例は中学1年生の男児で、中学入学直後から登校渋りを訴え、それが9ヶ月続いていた。1日の大半を自室にこもってゲームに執着し、食事や保清が乱れた。母がゲームの利用を制限すると母へ暴力を振るったが、父や来訪者がいる時には過剰にいい子の振る舞いをした。プログラム導入により、約3ヶ月後には家庭内暴力が消失、地域支援者との交流が継続的に見られるようになった。約2年後には自発的相談行動も定着した。プログラム終了1ヶ月後、半年後、1年後、2年後のフォローアップにおいても効果の持続が確認された。もう1事例は成人の男性で、大学中退後閉じこもりがちとなり、それが20年続いていた。自室にこもりインターネットや読書をするのが中心の生活となり、外出を全くしなくなった。食事や保清などの基本的な生活は保たれていたが、次第に自室に「ばい菌」が入ることへの不安が増し、「ばい菌」をふき取る手伝いを母にさせ、1回あたりの時間が2、3時間となった。さらに母を見ると大学中退時の話やばい菌の話をしたがり、時々話しているうちに興奮し母へ暴力をふるった。不安を理由に母の外出も制限した。これらの行動は来訪者がいる時にはおきなかった。プログラム導入により約2ヶ月後には受療行動が継続的に見られるようになったが、拭き取り行動や母を束縛する行動に改善は見られなかったため医師と相談の上精神科入院となった。約2年後にはそれらの行動も完全に消失し、退院した。考察ではプログラムの有効性やオリジナルの CRAFT との比較などが検討された。

第 5 章では「社会的ひきこもりについてのカルテ調査」として、社会的ひきこもり 30 例に対して本稿プログラムの前身となった介入を用いた場合の予後を、カルテ調査の形式で報告した。平成 22 年 4 月から平成 24 年 3 月の 2 年間に、A 相談機関（障がいをもつ児者への相談機関）を本人自身が来所したがらないため家族が来所したケースのうち、家族来所時に調査の基準を満たした 30 人が調査対象となり、プログラム実施後の予後などが調べられた。平成 24 年 6 月時点の本人の状況では、プログラムを経て自発的に相談中だった人が 10 人（35%）、就労支援機関や精神科デイケアなどの日中活動の所属先ができていた人が 8 人（27%）、精神科入院中か又は入院待ちだった人が 3 人（10%）、変化がない人が 9 人（30%）だった。考察では、プログラムの有効性、オリジナルの CRAFT との比較などが検討された。

第 6 章では「反社会的行動についてのカルテ調査」として、反社会的行動 32 例に対して本稿で開発したプログラムを用いた場合の予後を、カルテ調査の形式で報告した。平成 22 年 4 月から平成 25 年 3 月の 3 年間に、B 相談機関（発達特性について誰でも相談できる）で著者が相談を担当し、調査基準を満たした 32 人が調査対象となり、プログラム実施後の予後などが調べられた。平成 25 年 5 月時点の本人の状況では、自発的に相談するに至っていた人が 32 人中 16 人であり、そのうちの 16 人は全員精神科入院を経由していた。16 人のうち、統合失調症や重篤な身体疾患を併発した人を除く 10 人の平均入院機関は 127.4 日（88-251 日）であった。

第 7 章では総合考察として、本プログラムの有効性、本研究の課題、社会的意義が全体を通して検討された。特に有効性について、物質依存に関して両価的認知を主に取り扱うオリジナルの CRAFT と、ASD に関して行動変容を扱う本稿モデルとの比較を行うなかで再検討した。シングルケーススタディおよびカルテ調査からは本プログラムの有効性が示されたが、一方でそれらには研究デザインの課題や運用上の課題も少なくなく、エビデンスの集積に向けてさらなる改善が必要と考えられた。